

浜田 晋さん

不思議な魅力にあふれた精神科医だった。統合失調症の患者を生活の場で診る「地域精神医療」の先駆者だが、それだけではない。

医学的に高く評価される臨床医で、著名な作家らの主治医。地元の祭りが好きな町医者。詩を愛する文学青年。版画界で名の知れた収集家。演劇や歌も好きで、女性歌手の舞台に花束を抱えて駆け寄る姿を見たことがある。長年のうつ症状や不眠、挫折、母親との葛藤といった弱さもさらけ出した。

これら多面にわたる活動や思索は、自ら築いた新しい臨床をかたちづくる要素だったのだろう。

大病院を辞し、東京・上野で開業したのは1974年。外来カウンセリングはまた保険で認められておらず、周囲に大反対された。

日雇い労働者の街・山谷に近い診療所には、保健師らが地域に潜む患者を連れてきた。竹中星郎さん(69)は非常勤で診察して驚いた。「病院で診たことのない難しい患者が多かった。貧困、崩壊し

た家庭、長い治療放置……。地域で診る、という意味がわかった」

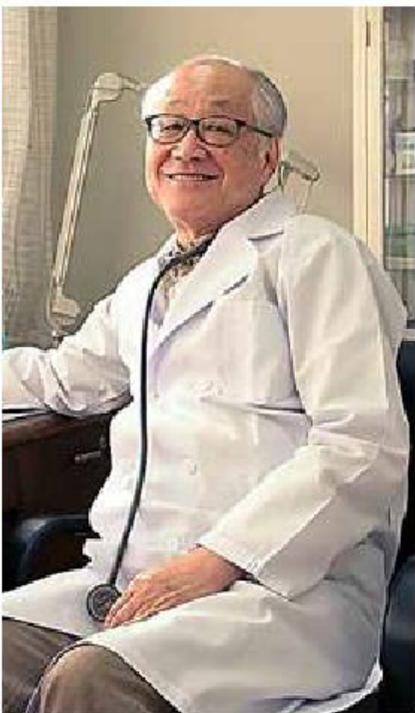
地域医療に尽くした人に贈られる「第1回若月賞」を92年に受賞。同時に受賞した在宅ホスピス医、徳永進さん(62)と翌年から計13回開いた「すすむ&すすむフォーラム」は、漫談のようでありて現代の医療と社会、家族の不条理をあぶり出し、人気を博した。

直筆メモから2文。「臨床は迷い迷いの迷い道」「患者と家族の言葉をつのみにするな」。現場にたたずみ、患者を深く愛したから出る言葉だと、徳永さんは思う。

老いるにつれ、老いと統合失調症を取り巻く課題は同じだと気付いた。「ともに社会から排除される病」。晩年は「老いの病」をつづるエッセイストでもあった。

昨年11月、先に脳梗塞で倒れた妻雅さん(83)のリハビリを手配した直後に血を吐き、甲状腺がんの肺転移がわかった。夫を見送った雅さんは今月退院。在宅ケアを受けて暮らす。(岡本峰子)

不条理見つめた「町医者」



はまだ・すすむ

2010年12月20日死去(呼吸不全)84歳
12月23日葬儀

浜田クリニックの診察室で2008年10月、
版画芸術142号「版画を飾る楽しみ」から